



元気おおとよ新聞

新年 あけまして おめでとうございます。

大豊のみな様にはお元気で新春を迎えられたことと思います。昨年は当法人へのご支援ご協力、誠にありがとうございました。本年も「NPO法人元気おおとよ」ならびに「元気おおとよ新聞」へのご支援やご鞭撻、そしてご愛読をどうかよろしくお願いいたします。

昨年は一向に収まる気配の見えないコロナウイルスやロシアによるウクライナへの侵攻問題が大きな関心を集めました。中で何より危惧されるのは、異常気象による地球温暖化問題やそれに向けての取り組みです。率直に言わせてもらえば、国や世界を束ねるべき組織には期待出来そうにありません。この問題には、スウェーデンのグレタさんが起こしたような社会的な活動が適しており必要ではないかと思えてなりません。

昨年の10月16日の高知新聞に「ノーベル平和賞―市民社会こそ戦争を防ぐ礎」と題して静岡県立大准教授の浜由樹子氏の論文が掲載されました。中に「：あえて草の根の活動家に光を当てた今回のノーベル平和賞は、戦争に反対している人々に向けて、分断をあおるのではなく、憎悪や悲しみが満ちた難局を乗り越えていくには、市民一人一人の力が必要と訴えているように思われる。：人間の生命と尊厳を守る市民社会の在り方に私たちが立ち戻ることこそが、遠回りのように見えても、唯一の王道である。」と述べています。対象は異なりますが、温暖化の問題にも当てはまる内容だと思えます。

さて元気おおとよにとっての昨年の大きなニュースは事務所の開設です。大田口テラスの1階の一室を借り受けることができました。これまで、部屋を借りたり、ふれあいセンターの会議室や各個人の家で会議や実務を行って来ましたが、これからは資料や器材や器具などが手元にあります。移住や空き家の相談や手続きも決まった場所で行えます。部屋を整理する時に、仲間の一人がポツンと「ああ、うれしい」ともらした一言が印象的でした。

大豊に目を向けると、厳しい状況は加速度を増しているように感じられます。求められるのは、先の平和賞の文章にもあるように「一人一人の力」だと思っています。松下電器の創始者の松下幸之助氏は、会社の存亡危機の時、「今、最も必要なのは、社員全員が力を合わせることに他ありません」と全社員に呼びかけました。

私たちも明日の元気な大豊をめざしてみなさんと共に進んでまいりたいと思っています。どうかよろしくお願いいたします。

本年が「**らんまん**」でありますよう、皆さまのご多幸と大豊の発展を祈念申し上げ新年のごあいさつとさせていただきます。



理事長 下村守正

空家対策モデル事業が始まりました。

大豊町から委託を受けて実施する「空き家対策モデル事業（以下、モデル事業）」が始まりました。

まずは、対象地区の区長さんへの事前説明を行って、随時地区を周りはじめています。

また、各地区で行われているミニデイにも参加して、モデル事業の内容を説明させていただきました。

皆さん、反応は人それぞれでしたが、「自分の家の処分をそろそろ考えたい」や、後日「近所の家が空いているので今度案内するよ」など、少しずつ反応を頂いています。

特に多かった意見としては、家の中の荷物がそのままでもできないというものでした。当然、高齢になればなるほど、荷物の処分が難しくなっていきますし、空き家を有効活用しようと思っても、片付けが障害となかなか先へ進めないという意見が大半でした。この問題は以前からありましたが、より一層空き家の片付けに関する取組に力を入れていかなければいけないと感じています。

当法人でも、移住者への賃貸や売買目的であれば、片付けのお手伝いをする取り組みを行っております。また、そうでなくても片付けなどを請け負ってくれる業者さんを紹介することもできますので、少しずつご自身やご家族のお家の事を考えていただければ幸いです。

引き続きモデル事業を通して、大豊町の空き家の課題が減り、地域の未来が明るい方向になるような事業にしていきたいと考えております。



【お知らせ】

前回の秋号にて、大田口事務所での空き家相談窓口の営業時間に誤りがありました。正しくは以下となりますので、ご確認をよろしくお願いいたします。

- ◆場 所： 大田口テラス（旧大田口小学校）1階
〒789-0250 大豊町黒石363-5 1階
（元気おおとよ大田口事務所）
- ◆日 時： 毎週水曜日9:00～15:00
- ◆連絡先： 070-8490-0228 担当 猪野

移住者紹介コーナー

<プロフィール>

バイオレット・パチレオ（日本とイギリスのハーフ） 41歳
カルロ・パチレオ（アメリカ出身）元救命士、ボディガードなど 52歳
長男：ベアー（大豊学園4年生）
次男：リョート（大豊学園2年生）
長女：モーガン（豊永保育所）

幼少期の思い出

祖父・大家正仁さん（先祖代々、豊永）は元国鉄職員、祖母・大家栄子さん（香川県出身）は駅前で駄菓子屋を営んでいたこともあり、幼少期によく遊びに来ていた、とバイオレットさんは当時を振りかえって話してくれました。地域の行事に参加したり、川や野を駆け回った思い出は、大人になっても心に残っていて、地域には知り合いも多く、馴染みがあったそうです。

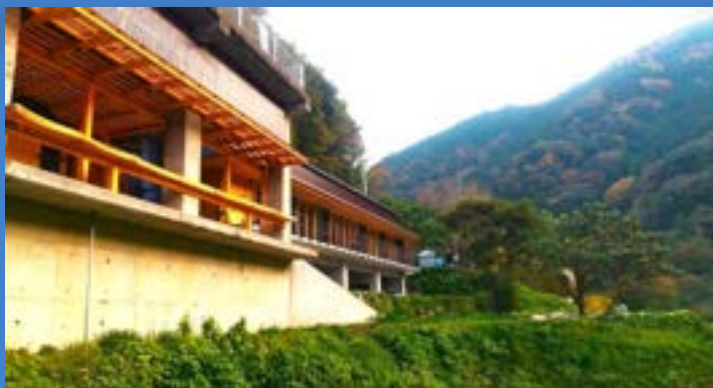
家族でアメリカ・ロサンゼルスから東京に戻った後、1年に1回ほどの頻度で大豊に来ていたけれど、祖父母が亡くなった後は、母親の大家悦子さんが1人になってしまった事を心配し、「今のペースだと、あと20回ぐらいしか母に会えないかも」と思うと寂しくなったと語ってくれました。



東京から大豊へ

バイオレットさんは、ヘッジファンドで日本に来る中国人の消費動向調査（中国への出張などもあった）や財務分析など、バリバリ働いていましたが、母親のことが心配で、頻繁に大豊へ来て草刈りや家の手入れをするようになっていました。そこで、夫のカルロさんが「いっそのこと大豊で暮らしてみないか？」と提案してくれたそうです。

2019・冬（コロナ直前）に決断をし、まずはカルロさんと子供たちが先に大豊へ移住。バイオレットさんは、しばらくは東京で単身赴任、その後大豊に来てからはテレワークで働いていたけれど、ちょうどコロナが流行り始めたせいで自由に移動ができなくなり、バイオレットさんの仕事の契約も切れてしまいました。



地域のためにできること

2020・夏、NHKのTV番組「ジャーニーズinジャパン」（※海外向けの日本を紹介する番組）の取材リポーターを引き受けることになり、1週間にわたって大豊町内の各所をインタビューし、色々な事を見聞きすることで「この町には手助けが必要」と感じたそうです。都会よりも田舎で自分のスキルを活かす方が人のためになると考え、地域のために何が必要か、何ができるのか、様々なプランを考えました。

日本に来る前に、夫のカルロさんは、クロスフィット指導員の資格を取得し、またバイオレットさんも一会員としてクロスフィットを実践していました。そこで、高齢化が進む大豊町で、健康で元気な老後を過ごせるよう、手助けができないかと考え、「クロスフィット」ジムの建設に着手することを決めたそうです。実際にバイオレットさんの母親は現在も継続的に実践しており、体力がついてとても元気になられたそう。トレーニングというと若者がするイメージが強いですが、クロスフィットは、筋力トレーニングと持続的トレーニングの両方を、1時間で効率よくできるプログラムになっており、負荷を変えることで、幅広い年齢層の方に対応できます。また、何人でも一緒に参加できるので、お互いに励まし合ったり交流の場としても活用できます。

子供向けのプログラムもあり、キッズクラスも開催しています。というのも、高知県は子供の肥満率が高く、特に車社会である大豊町では、歩くことがほとんどないので、他市町村から比べて基礎体力がとても低いのです。お二人のお子さん達は日常的に遊びの中でクロスフィットを実践しており、ずば抜けた体力を持っています。



大豊での暮らし

大豊での暮らしは、「自然環境が素晴らしく開放的で健康的、子供たちの養育にもとてもいい」とカルロさんは話してくれました。無口で怖そうなイメージの外見（ごめんなさい）とは違い、子供たちのことをとても考え、一生懸命地域になじもうとしています。文化や風習、生き方や考え方の違いを同じにすることはできないけれど、互いを認め合い理解しようとすることで、共存できると信じています。自然や環境問題にもとても関心を持っていて、自分たちにできることを淡々とやる、まじめで自然体な印象を受けました。

一方、バイオレットさんは、「（年齢を重ねてきた）今だから、大豊の良さを感じられるし、何より母親がそばにいる安心感は、この上ない幸せ」だと、話してくれました。

今後の目標

まずは、地域の方々にトレーニングに関心を持っていただき、健康な身体作りのお手伝いをしたい。そして、コロナが少しずつ収まって、インバウンドや観光客が戻ってきた時を見据え、観光業にも携わっていきたいと今後の目標を熱く語ってくれました。実際、宿泊施設やアシスト自転車のレンタルなども始めていて、他の観光施設等とのコラボも検討中ようです。今後の活躍に期待し、一緒に大豊町を楽しい町にしていきたいと、強く感じました。（野田由美子）

